

丸山英観『愛ちゃんの夢物語』

川戸道昭

「明治の『アリス』—ナンセンス文学受容の原点—」『児童文学翻訳作品総覧』1 イギリス編(大空社・ナダ出版センター、2005年6月)より抜粋

明治期の『不思議の国のアリス』の翻訳は、現在わたしが揃えているものだけでも合計五点存在する。その中で最も注目されるのは、明治四三年二月に内外出版協会から出版された『愛ちゃんの夢物語』と題する翻訳書である。同作品の訳としては前回紹介した永代静雄の翻案に次いで二番目に古いものだが、永代のそれのように原作の一部を抜粋して読み切りの短編物語に仕立てた翻案作品ではなくて、原作のすべてを省略せずに訳出している点で、これが事実上の本邦初訳であったと考えてさしつかえないものである。全篇二〇九頁からなる本書には原作中にみられるジョン・テニエルのさし絵がところどころに挿入されていたり、その訳題がいかにも時代を思わせる面白い訳題であったりすることから、一部のキャロル文学ファンの注目を惹いて、NHKの娯楽番組などで取り上げられたこともあった。翻訳者は、早稲田大学の英文科を卒業し、のちに日蓮宗の寺の住職となる丸山英観という人物。そんな異色の翻訳者の手になる本邦最初の『不思議の国のアリス』とは、一体いかなる種類の翻訳であったのか。さいわい、この翻訳は原作の一章から二章までを省略なしにすべて訳出している全訳であるところから、内容を一つ一つ原書と比較しながらその長短を論じていくことができる。それがはたしてどこまで原作者の意図に忠実な訳文となっているのか、現在の翻訳との比較もまじえながら、その特色について考えてみることにする。

丸山の翻翻訳ぶり　そこでまずは丸山の翻訳者としての力量をはかるために、作中最も興味深い言語の技法がちりばめられている第三章を例にとってその翻訳ぶりを点検してみることにしてしよう。「コーカス・レースと長いお話」という題を有するこの章は、よく知られるように、同音異義語や同一多義語を駆使した言葉あそびが頻発する。たとえば、ここで最も重要な意味をもつと思われる単語をあげると、“dry”という語と、“tale”と“tail”、“not”と“knot”という同音異義語である。これらの言葉を、作中人物がそれぞれの解釈にしたがって独自の使い方をしていくところに、思いがけぬストーリーの展開がはかられ、キャロル文学特有の不条理な状況が引き起こされていくというのが本章の興

味の中心である。丸山は、そうした言葉がきっかけとなって互いの心に引き起こされる心理効果にどこまでついていくことができたのか。その翻訳の状況をよりきめ細かく検証することができるように、ここでは上にあげた一つの多義語と二組の同音異義語を使った話の展開を、それぞれ解釈の難易順に三段階にわけて、丸山の翻訳ぶりを考察してみることにする。

最も乾いた話　まずはその中でも最も単純な“dry”という語の点検からはじめよう。丸山はこの“dry”という語にどのような訳語を当てているのか。話は、例の、第二章の終わりでアリスが流した涙の池に落ちてびしょぬれになったアリス自身やドードー、ネズミらの一行が、まず体を乾かそうということになって、その方法について考える場面である。一行の中でも一目おかれているネズミが口を開いているには、〈わたしがみなさんをすぐに乾かしてあげますぞ(I'll soon make you dry enough!)〉、〈よろしいか、これがわたしの知る最も乾いたものです(Are you all ready? This is the driest thing I know.)〉と前置きした上で、長々しいウィリアム征服王時代の話をはじめ。体を乾かす話がいきなりウィリアム征服王時代の退屈な史談に変わったので、読者は煙に捲かれたような気持ちになるが、よくネズミの言葉を調べてみると、彼の使った“dry”の語には洗濯物などが〈乾く〉という意味と、話の中身が〈無味乾燥な〉という二重の意味が存在することに気がつく。ネズミはみんなを〈乾かす(make you dry)〉ために、〈最も無味乾燥な(the driest)〉話しをはじめたというわけだ。そうと解ってみればなるほどそういうことかと、そのナンセンスぶりに合点がいく次第である。丸山はこの第一関門をどのように乗り越えているのか、そこで彼の訳文を点検するとこんなふうになっている。

〈坐り給へ諸君、まア聞き給へ、僕が直きにその乾くやうにして見せる！〉〈諸君宜しいか？最も乾燥無味なものは是です、まア聞き給へ、諸君！『ウィリアム第一世、其人の立法は羅馬法皇の御心にかなし、忽ちにして首領の必要ありし英人の従ふ所となり……』〉。

一つの言葉の中に二重の意味を込め、それを作中人物に独自の使い方をさせることによって常識とはかけ離れた不合理な状況を創り出していく。それがキャロル文学にみられる言葉あそびの特徴の一つだとすれば、丸山のこの訳文からもそうした作者の意図は十分に伝わってくる。まずは第一関門突破とみていいだろう。

長い哀れな身の上話　それに対して、第二、第三の関門はこれほど容易なものではない。今度は、先にも述べたとおり同音を有する異なる二語を、会話を行っている二人の人物が、それぞれ別の語と受けとめることによってナンセンスな状況を創り出していかうとする試みである。その試みを具体例に即して説明するとういうことだ。ネズミのいう方法では少しも体が乾かないことがわかった一行は、ドードーの提案を容れて〈コーカス・レース〉を行い体を乾かしたのち、ネズミに向かってもっと話をしてくれと頼む。アリスも〈あなたは自分の身の上話(history)をしてくれる約束だったでしょう〉とネズミをせ

先述したとおり〈愛ちやん〉が〈身の上話 (tale)〉を〈尻尾 (tail)〉と思いこんでしまったために起こってきたボタンのかけ違いを、その同音異義語に対する翻訳上の配慮がまったく欠けているために、読者には〈愛ちやん〉がなぜ尻尾が〈可哀相なの?〉と不思議に思う理由がはっきりしないのである。さらに、それに続く場面も、〈愛ちやん〉がネズミの話の聞いている間じゅう〈どうして尻尾が哀れなのかということに頭を悩ませていた〉たという内容を、ネズミの尻尾とは切り離して〈始終謎でも聞いているやうな気がし〉たと解釈しているために、アリスの意識の中でネズミの話がその尻尾のかたちを取って現れてくる理由が読者にははっきりしないのである。これでは、ネズミとアリスの胸中に流れるそれぞれ一貫した意識の流れや、その両者を総合してみたときのちぐはぐな状況は一向に浮かび上がってこない。つまりキャロルの仕組んだ同音異義語を基礎とするナンセンスな面白味はまったく読者には伝わらないということになる。

現在の翻訳者ならば、たとえば、原文の同音異義語に〈^て身の上話

尻尾

とルビを振ったり (多田幸蔵訳、旺文社英文学習ライブラリー)、〈長い悲しいお話〉〈長い^{おぼろ}尾生やし〉というような適当な語呂合わせを考えたりして (矢川澄子訳、新潮文庫)、うまくその辺を切り抜けるころだろうが、丸山はそのような技法も、あるいは原作者の意図を尊重する姿勢も、十分に持ち合わせていなかったというのが実状であろう。

“not” と “knot” 以上がわたしのいう第二関門であるが、真の難関はその先にある。このあとネズミはアリスが自分の話に一向に耳を傾けていないことに気づき、君はちっとも聞いていないねと彼女をなじる。アリスはとっさに、頭の中にネズミの尻尾のかたちをとって現れている彼の話の思い浮かべて、いま〈その五番目の曲がりのところまで来たんですね (you had got to the fifth bend, I think?)〉と答えるが、ネズミは何のことやら分からず〈いや違う! (I had not!)〉と語気をあらげて反論する。

その答えの中の“not”という語を“knot” (結び目 [筋のもつれや難問の意味を含む]) と取り違えたアリスは、〈結び目!〉〈それなら、ぜひわたしにほどくのを手伝わせて下さい〉とネズミの心を気づかって声をかけるが、ネズミのほうは腹を立ててその場を立ち去ってしまい、アリスもなにがなんだかさっぱり解らないまま彼の後ろ姿を見送るというのが一連の経過である。

わたしのいう第三関門は、この“not”と“knot”という同音異義語にかかわる問題である。これらの二つの語を一方は“not”と認識し、もう一方は“knot”と受けとめた。そこに到達する前後の両者の思考の違いをきちんとたどることができるようにした上で、その奇妙にくいちがった二人の思考の流れを総合してみたときに明らかになってくるナンセンスな状況を的確に日本語に訳出していくことができるかどうか、それが最後にして最大の難問であるが、ここに至ると丸山の翻訳はおろか、その後の翻訳でも、なかなかこれで完全という域に達しているものは少ないように思われる。そこには、キャロルの作品のように、ある言語に固有に備わる統語法や響きを巧みに利用して成り立っている文学作品を訳出することの難しさが集約されている。

しかし、過去九十年間にわたる本作品の翻訳の蓄積のなかには、この難問を、単なる表面上の言葉の意味だけではなく背後の思考の流れにも十分注意を向けてうまく日本語に訳出している例もないわけではない。たとえば、その一例をあげると、高橋康也・迪氏の共訳（新書館、一九八五年）になるこんな翻訳である。

〈「ちゃんと聞いていないじゃないか！」ハツカネズミはアリスにきびしくいいました。

「なにを考えているんだ？」

「ごめんなさい」アリスはすなおにあやまりました。「五つめのまがり角にきたところじゃなかったかしら？」

「きてないさ！（I had *not*!）」ハツカネズミは怒って叫びました。

「きたないですって！（A *knot*!）」いつでも人の役に立ちたくってうずうずしているアリスは、熱心にあたりを見まわしながら叫びました。「どうぞわたしにきれいにするお手伝いをさせて！」

「そんなこと、だれにさせるもんか！」ハツカネズミは立ちあがって、あちらへいきかけました。「あんたという人は、そんなくだらないことばかりいってわしを侮辱するんだ！」

この会話における最大のポイントは、まったく容れあうことのないネズミの視点とアリスの視点の一つに同居している点にある。ネズミはネズミで終始一貫したことを話しているし、アリスはアリスで同じように十分に脈絡のある受けとめ方をしている。アリスとネズミのどちらか一方の視点に偏していたのではみえてこないちぐはぐな状況が、それを総合する第三の視点、すなわち読者の視点に立つことによってはじめてみえてくる。そこにこの会話の最大の妙味がある。換言すると、それを翻訳する上で最も肝要な点は、両者あい容れることのないアリスとネズミの視点を、それぞれかみ合わぬままに一貫性を保ったものとして訳出していくことができるかどうかということにある。

上に掲げた翻訳は、問題の“not”と“knot”の部分だけを取り上げてみると、〈きてない〉〈きたない〉というように多少原義とは離れる感じもしなくはないが、それぞれ独自の流れで進行している両者の思考経過に中断はみられないし、アリスがここでネズミの言った〈きてない〉を〈きたない〉と取り間違えたことをきっかけに双方の意識のずれが決定的になっていく状況もよく伝わってくる翻訳となっている。

単語の意味だけを問題にするならば、この“not”と“knot”の部分も、〈五回なもんか！〉〈あら、どこでこんぐらがっちゃったの〉と訳している矢川澄子氏の訳のほうがより原義に近いように思われなくもないが、矢川氏の訳では、アリスとネズミの心の内がこれらの語をきっかけに離反していく様子がみえてこないばかりか、反対にこれらの語を通して両者の心の接近がはかれるという結果になってしまっている。

これでは原作に備わる不条理な状況はよく伝わってこない。その核をなす“not”と

“knot”という同音異義語の取り扱い方に関しても、それに〈きてない〉〈きたない〉の類
似の音を有する言葉を当てた高橋氏の訳のほうがより原作者の意図に配慮した翻訳という
ことができるだろう。

このように現在の翻訳者にとってもなかなか一筋縄ではいかないキャロルの言葉あそび
に丸山はどこまで意識的についていくことができたのか。ここに取り上げた“not”と
“knot”の翻訳の仕方をみればそれは一目瞭然である。その部分に対する丸山の翻訳は、
『貴方はこれで五度お辞儀をしましたね?』／『しない!』と鼠は怒つて叫びました。／
『皆さん!』と云つて愛ちやんは、尚ほ続けやうとして気遣はしげに身の周りを見回し、『さ
ア、これで解散しようぢやありませんか!』というように、ほとんど翻訳の体をなさない
とっていいほどの混乱ぶりを示している。

丸山が原作者の意図を十分につかみ切れていなかったことは、本書の巻頭におかれた〈は
しがき〉の内容をみても推測が可能である。全文八行からなるその〈はしがき〉の文章は
こんな言葉で結ばれている。〈姉さんの膝を枕に仮寝に結んだ愛ちゃんの夢、解いてほどけ
ば美しい花の数々、色鮮かにうるはしきを摘みなして、この一篇のお伽噺は出来あがつた
のです〉と。彼がこの作品を単なるお伽噺の延長線上にしか考えていなかった一つの証拠
とみることができるだろう。結局、丸山の翻訳というのは、一部ネズミの尻尾型に訳文を
並べる等、それまでにない画期的な試みもみられなくはないが、原作者の言葉の使い方
に対する十分な理解が欠けていたために、あるいは英文解釈上のあやまり（誤訳）がみられ
ることから、原作の面白味を十分に伝えきれない中途半端な翻訳に終わったということに
なるのではないだろうか。

丸山英観という人物 そうはいうものの、日本の『不思議の国のアリス』全訳の試み
はこの『愛ちゃんの夢物語』をもってはじまったという事実は否定しがたいものであり、
われわれはその先駆的な試みに対し十分敬意を払う必要がある。丸山は前にも触れたよう
に、早稲田大学の英文科の出身（明治四一年卒業）で、同じクラスに若山牧水、土岐哀果、
佐藤緑葉、安成貞雄、三沢豊、沖田勝之助、藤田進一郎らがいた。これらの面々は在学中
に北斗会と称する会を結んで回覧雑誌を発行したことで知られるが、丸山がそうした文学
運動にどこまで関心を寄せていたかは不明である。

丸山のその他の経歴に関しては、早稲田大学の校友会名簿（大正二年一一月調³⁵）に「豊
多摩郡淀橋町柏木常円寺」と住所がしるされ、職業が「商業」、本籍が「神奈川」となっ
ていること以外、わたしには詳しいことは掴めないでいたが、国立図書館に三十年間勤務さ
れて同館所蔵の児童書をくまなく調査された石川春江氏の『国立国会図書館の児童書』と
いう書物の中に「日本における『不思議の国のアリス』の初期翻訳³⁶」と題する一文があり、
そこに丸山の経歴に関する次のような貴重な報告があることがわかったので、以下に紹介
しておく。

〈この『愛ちゃんの夢物語』はNHKの「ホントにホント」に国会図書館の所蔵本とし

て紹介されたということで、訳者丸山英観氏の娘さんから図書館あてに手紙をいただいた。／それによると、丸山英観は明治一八年一月一八日横須賀に生まれ、東京芝二本榎にあった檀林（寺の子弟を養成する機関）で学んだ後、麻布中学に進み、四修で早稲田の英文科に入り明治四一年卒業、一時黒岩涙香の「萬潮報」に勤め、すすめられるままにいろいろ翻訳をしたという。もともと寺の息子であったため、山梨県立女学校の教師を経て横須賀堀の内の日蓮宗泉福寺の住職となり、昭和三一年二月五日、七二歳でなくなったとのことである。)

ここで一つ注目したいのは丸山の早稲田大学在学の期間である。丸山の早稲田卒業が明治四一年であったということは、おそらく入学した年は明治三七、八年であったと思われる。同級生の若山牧水を例にとると、牧水が延岡中学を卒業して早稲田の高等予科に入学したのは明治三七年の春で、翌三八年夏に英文科本科に進んでいる。それから考えても、丸山の入学も明治三七、八年と考えておそらく間違いないと思われる。

なぜそれが問題かということ、前回紹介した永代静雄の在籍の期間と重なるためである。永代は明治三九年四月の「高等予科文科」入学（同年一〇月除籍）⁽³⁷⁾で、短い期間ではあるが二人は同じ時期に早稲田に在籍したということになる。そればかりか、二人の前に「鏡世界」を発表した長谷川天溪もまた、明治三〇年に早稲田大学の前身である東京専門学校⁽³⁷⁾の文学科の卒業生であった。丸山以前のキャロルの翻訳者がいずれも早稲田の出身者であったということは、やはりこの時代のキャロル作品の翻訳には、早稲田における師弟関係や交友関係がなんらかのかたちで影響を及ぼしていたと考える必要があるのではないか。

『アリス』の翻訳と早稲田大学の出身者　　そういうことで改めて初期のキャロル文学の紹介と早稲田大学の関係について詳しい調査の光を当ててみると、驚いたことに明治・大正期の翻訳者のうち半数以上をその出身者が占めるという事実が浮かび上がってきた。参考までに早稲田の出身者による初期のキャロル作品の翻訳リストを以下に掲げると次のようなものである。

長谷川天溪「鏡世界」（『少年世界』明治三二年四月～一二月）

永代静雄「黄金の鍵」「トランプ国の女王」「海の学校」（『少女の友』明治四一年二月～四月）

丸山英観『愛ちやんの夢物語』（内外出版協会、明治四三年二月）

永代静雄『アリス物語』（紅葉堂書店、大正元年一二月）

楠山正雄『不思議の国』（家庭読物刊行会、大正九年三月）

西條八十「鏡国めぐり」（『金の船』大正一〇年一月～一二月）

最後の西條八十の翻訳が出版された大正一〇年までの段階でいうと、ここに掲げた以外のキャロル作品の紹介は、長谷川康の対訳「不可思議国探検記」と、同じく大溝唯一の対

訳『アリス物語』、それに丹羽五郎翻案の『子供の夢』（のち『お正月お伽噺』と改題）の三点しかない。つまり、大正一〇年までに翻訳・翻案されたキャロル作品全八点（永代の作品は合わせて一点と計算）のうち五点までが早稲田の出身者による翻訳・翻案であったということになる。

なぜ、それほど多くの早稲田出身者がキャロル作品の翻訳に関係することになったのか。その理由としては、単純に、この時代に早稲田が輩出した作家の数を反映したのにすぎないということが考えられる。たとえば、明治三〇年代後半から明治四〇年代に早稲田に学んだ児童文学と縁の深い作家の名前をあげるだけでも、小川未明、北原白秋、土岐善麿、西條八十、楠山正雄、秋田雨雀というように著名作家の名前がならぶ。キャロル作品の翻訳の多さは、単にこの早稲田出身の文学者の多さを反映しているにすぎないという推測が成り立つ。

たしかに、そういうこともいえると思うが、わたしの見るかぎり、どうもそれだけではないような気がする。その背景には早稲田の学園において培われた師弟関係、交友関係が深く関わっていたように思われる。たとえば、永代静雄は『アリス物語』の〈はしがき〉のなかで〈私は曾て早稲田大学の教授内ヶ崎愛天先生から、キャロルといふ人の書いた『アリスの奇界探検』といふ本を拝借して読んで、非常に面白いと感じた〉と述べている。また、西條八十は「鏡国めぐり」を収録した『西條八十童話集第一篇』の序文で、〈私の懐かしい少年時代に、この作が一度長谷川天溪氏の筆によつて「少年世界」に訳載されたことがある。当時の私がこの珍奇な物語に対して繫いだ興味は、今から回想して寧ろをかしいほど熾烈であつた〉と述懐している。永代と内ヶ崎が早稲田における師弟の関係であったことはこの文面をみれば明らかだが、八十と天溪のほうも、八十が早稲田大学卒業時に書いた「シング論」を教授の天溪が認めるという、さらに親密な師弟関係にあつた⁽³⁸⁾。このように、早稲田出身者によるキャロルの翻訳が多数生まれた背景には、そこで培われた師弟関係、交友関係が深く関係していたと考える必要がある。

なかでも注目すべきは、永代に〈『アリスの奇界探検』といふ本〉を貸し与えたという内ヶ崎作三郎の存在である。永代に貸したとなると、同じ時期に早稲田に在籍したほかの学生にも貸したという可能性が十分考えられる。あるいは、貸さなかったにしても、その内容を紹介し、講読を勧めるぐらいのことはしたかもしれない。内ヶ崎は明治三四年七月に東京帝国大学を卒業し、卒業と同時に早稲田大学に奉職する。それ以降、イギリスに留学するために日本をあとにする明治四二年までの早稲田の在籍者を調べてみると、上記六人のキャロル作品の翻訳者のうち、天溪をのぞく五人までが、その間に早稲田に在籍していた人たちであったことがわかる。つまり、彼らもまた、永代同様、内ヶ崎をとおして『不思議の国のアリス』の原書を知ったという可能性が十分に考えられるのである。

ラフカディオ・ハーンの功績 では、内ヶ崎自身は、どのようにしてキャロルのことを知ったのか。それについては、最近日本ルイス・キャロル協会の相原由美子氏が大変興味深い論考を⁽³⁹⁾発表している。相原氏によると、内ヶ崎は東京帝国大学時代の恩師であるラ

フカディオ・ハーンの講義を通してキャロルのことを知ったのではないかということである。ハーンは、その講義の中で『不思議の国のアリス』を取りあげて、〈これまで生み出されたすべての子供の書物の中で最高のもの〉と絶賛している。あるいは〈子供の感情や空想を描き出す才能においてスティーブソンを凌ぐ作家〉ともいっている。これは、同時期に国の内外で出回っていた英文学史がキャロル作品を完全に閑却しているのとはまったく逆の立場に立つもので、キャロル文学の受容史上注目に値する講義であった。その講義を聴いた内ヶ崎が、やがて早稲田の教壇に立って、キャロルの魅力を伝えるよき伝道者となったというのも十分うなずける。後年、ハーンが東京帝国大学を追われた際に、彼を早稲田に紹介する仲介の労をとったのも、ほかでもない内ヶ崎その人であった。ハーンという人物にはそれだけのカリスマ性が備わっていたのである。

ともあれ、内ヶ崎はハーンの講義をきっかけとしてキャロル作品を知った。そして、今度は自分が早稲田の教壇に立ったとき、その魅力を永代をはじめとする教え子たちに伝えていった。それが、早稲田出身者の間にキャロル作品が広まり、彼らとその翻訳を手がける主な原因であったと思われるのである。東京帝国大学でハーンの講義を聴いた学生は少なくなかったが、ほかの教え子たちにキャロル文学のよき伝達者となった人物が見あたらないというのは、そのことを裏づけるなによりの証拠といえるだろう。

いずれにしても、明治から大正にかけてのキャロルの受容史は、ハーンと内ヶ崎、さらに内ヶ崎と早稲田の出身者たちという師弟の結びつきを抜きにしては語れない。なかでも注目しなければならないのは、その中心に位置したハーンが存在である。ハーンとキャロル作品の関係は、彼の亡くなる明治三六年以降も、忘れられることなく人々の間に語り継がれていく。たとえば、大正一四年に刊行された児童書の巻末の広告にはこうある。〈ルイズ・カアロル著／『アリスの不思議国めぐり』／小泉八雲が推賞した珍しい童話。……兎の穴へ入ったり、涙の海へ飛び込んだり、トランプ国のクインと珠遊びをやったりするの、読みかけたらきつと御飯を食べるのを忘れることでせう。〉と。

日本の知識人にキャロル文学の重要性を説いた恩人として、また、読書界にその作品を定着させた最大の功労者として、ハーンの名前は永く語り継がなければならない名前であろう。